

胡堂賞

つまんないをおもしろくするには

古館小学校 3年 稲垣 秀磨

みんなはつまんないことがありますか。ぼくはたまにあります。ときどきあるつまんないことをおもしろくしたいと思い、この本をえらびました。

この本は、しゅ人公がつまんないことについて、何がどうしてつまんないか考えるお話です。

この本を読んで、ぼくが心にのこったところは二つあります。

一つ目は、しゅ人公が世界一つまんない遊園地を想ぞうするところです。理由は、その遊園地はつまんなそうだったけど、ぼくにとってはうれしいところがあるからです。ぼくは、ジェットコースターがこわくて、スピードがはやいとのれません。しかし、この本に出てくるつまんない遊園地は、スピードがおそく、これならぼくものれます。みんなにとってはつまんなくても、だれかにとっては楽しいことがあるんだなと思いました。また、見方をかえて考えることが大切だと思いました。

二つ目は、自分の思い通りにならないとつまんないのだろうかと考えるところです。なぜなら、そのしゅ人公とぼくはにてるなと思ったからです。おにぎりをお母さんといっしょに作ったとき、ぼくも同じようなことがあります。お母さんは、すごくきれいに作れているのに、ぼくは思い通りの形にならず、おにぎりを作ることがつまらなくなりました。ほかに、植物がうまくそだたなかったり、ゲームでミスをして負けたりなど、自分の思い通りにならないことがたくさんあります。自分の思い通りにならないと、自分やまわりにイライラしてしまったり、つまんないからもうやらなくていいや、ちがうことをやろうという気持ちになったりします。そのため、この場面にはすごくきょうかんしました。

この本を読んで、つまんないことがあったときにどうすればおもしろくなるのかが分かりました。それはつまんないことを考えることです。なぜなら、この本でしゅ人公がつまんないことを考えるときに楽しそうにしていたからです。それを見て、ぼくもやってみたいと思いました。たとえば、おにぎ

りがうまく作れなかったときに、見方をかえて、ちがう形のおにぎりを作りたいです。三角のおにぎりがうまくできなかったときは、丸くしてのりをはって、サッカーボールの形のおにぎりが作れるんじゃないかなと思いました。これからもつままないことやつままないときがたくさんあると思います。そのときはまず、つままないことを頭の中で考え、想ぞうしたいです。そして、見方をかえて、つままないことを自分なりにおもしろくしていきたいです。

図書名 つまんない つまんない
著者名 ヨシタケ シンスケ

胡堂賞感想文について

審査員講評

普段、なかなか考えることのない『つままないこと』。この本をきっかけに、何がどうしてつままないのか、どうしたらつままないを面白くできるのかを、真剣に考えた様子が伝わってきました。秀磨さんがこれから出会うであろうたくさんの『つままない』を、どのように発想を転換させて『面白い』にしているのか、読み手の期待が膨らむ作品となっています。

教育長賞

みんなでおいしく食べて生きる

紫波東小学校 3年 佐藤 真央

私は、料理を作ることが大好きです。そして、私が作った料理を家族に食べてもらうことも大好きです。家族が私の作った料理を食べて、「おいしいよ」とか「上手に作ったね」と言ってくれると、うれしくなって、また作りたいくなります。

そんな私は、料理の本を読むことが大好きです。料理の本をさがしに図書館へ行ったとき、「食べる」という本を見つけました。この本は、楽しいイラストを使って、食べることのふしぎや食べ物の大切さ、食べるにかかわるさまざまなことについて書かれていて、さいごまでむちゅうで読みました。

とくにおもしろかったのは、主人公の女の子が、みそ汁と野菜いためと白いごはんとなつとうを食べているところです。食べることで、とてもぎやかなのだそうです。そして、とってもいそがしい。なぜかという、食べ物の中には、味だけではなく、色もかたちにもおいも音もあるから。だから、口も目も耳も鼻も、おいしいを感じるために大いそがし。

この本を読んで、私の食べるときを思い出してみました。みそ汁の中のエノキを食べて「シャキシャキ」とした歯ごたえを耳で感じたとき。ぎょうぎがパリパリの羽をつけて大きなお皿にならべられたときのおこげの色といいにおい。目も耳も鼻も使って、大まんぞくになります。よく考えてみると、食べるって、本当ににぎやかでいそがしいな、そして楽しいことだなんて思いました。

そして、私になるほどと思ったことがあります。それは、「食べものは、ちよつと前まで生きていた。私たちと同じ、生きものだった」ということです。ぶた、鳥、魚は生きていたと分かるけれど、お米や野菜やわかめもみんな生きもの。

お姉ちゃんが、

「植物は生きているから、成長して、おいしいお米や、野菜がとれるんだよ。」と教えてくれました。私の家の野菜たちも生きている。ピーマンやきゅうり、ミニトマトは、この夏、新しい実をどんどんつけてくれました。その新せん



な野菜を毎日食べられるなんて、私はなんて幸せなんだろうと思います。
私のお母さんは、食事の時、いつも

「食べもののいのちに感しゃして、せすじを正して食べなさい。」
と言います。私は、「おなががすいているのにうるさいな。いつも同じこと
を言わないでほしいな。」と思っていました。だけど、食べもののいのちを
私は食べて、私は毎日生きているんだということをこの本が教えてくれまし
た。

私は、これからも食べものに感しゃして、おいしいを感じて、毎日元気に
生きていきたいです。

図書名 たくさんのふしぎ 食べる
著者名 文：藤原 辰史
絵：スケラッコ

優秀賞

わすれんぼうの意味はいつぱいある

西の杜小学校 3年 照井 菜緒

わたしは、「わすれんぼうにかんぱい！」という本の名前が気になったので、この本を読むことにしました。わすれんぼうと聞いたら、よくないイメージがあります。どうしてそのわすれんぼうに「かんぱい！」なのかが気になりました。

三年生の青木まゆみさんのお母さんはけっかくという病気になって、入院することになりました。そして、まゆみさんは、新しい学校にてん校することになりました。まゆみさんは、病気がうつるかのうせいがあるため、お母さんに会うことはできませんでした。そこで、おばさんが学校の先生に「学校にいる間だけでも、心配もさびしさもわすれさせてほしい」とおねがいするところからお話が始まります。

まゆみさんは、お母さんに会えないさびしさや、てん校してきた不安から、勝手になみだが出てきてしまうことがたくさんありました。もし、わたしがまゆみさんと同じ立場だったら、同じように泣いてしまうと思います。そして、てん校してきたクラスになじめなくて、一人ぼっちで、さみしい気持ちでいたと思います。しかし、学校のみんなが声をかけてくれて、だんだんと、なかよしな友だちもふえて、さみしい気持ちをなくすことができました。まゆみさんのさびしい気持ちがなくなり、わすれんぼうになれたときには、わたしも心があたたく、ぽかぽかした気持ちになりました。

この本を読んで、とくに心にのこったところがあります。それは、クラスのたんにんのひとし先生がおそなえものを電車にわすれてしまったところです。クラスのみんなに話すときに、自分の頭をぐつんとたたいて話していたところがおもしろかったです。わたしも時どきわすれ物をしてしまうことがあるので、ひとし先生のはずかしい気持ちがよくわかります。みんながわらっていたので、わたしもこのクラスのなかまに入りたくなるほどの、明るい楽しいクラスだと感じました。

わたしは、この本を読む前は、わすれんぼうというのは、しゆく題や筆記用具などの物をわすれることだと思っていました。しかし、この本を読んで、

わすれんぼうの意味は、たくさんあることを知りました。また、わすれものをして、ちえをはたらかせて工夫したり、みんなに助けってもらったりすると、こまったこともかいけつできることがわかりました。悲しいことやしゃばいしたことをわすれるようなわすれんぼうは、わたしはとても良いと思いました。もしも友だちが悲しそうにしていたら、この本のクラスの友だちみたいに元気づけて、悲しい気持ちをわすれるような、わすれんぼうにしたいです。

こまったときや、悲しいことがあっても、そのことを話して、かんぱいをして、みんなでわらい合えるのがすてきだと思いました。

図書名 わすれんぼうに かんぱい！
著者名 作…宮川ひろ
絵…小泉るみ子

入 選

ちのはなしを読んで

紫波東小学校 4年 吉田 壮慶

転んだ時に、「どうしてだろう。」と不思議に思ったことがあります。それは、血が止まることです。転んですりむいて、とても痛いのに、しばらくすると血は止まっています。

四年生の理科では、筋肉や関節などの体の仕組みを学習します。学校で学習したことをもとに、自分の体についてもっとくわしく知りたいと思ったので、この本を読むことにしました。

本の中には、心ぞうから血をおし出す仕組みが書いてありました。ぼくは、この仕組みを知りませんでした。心ぞうは、ポンプの役割をしていて、血を体全体に送っているそうです。生まれてから死ぬまで、休みなく動き続ける心ぞうはすごいなと思いました。

心ぞうの音をきく方法ものっていました。多くの人は、病院でお医者さんが使う、ちようしん器できく方法を思いうかべると思います。しかし、もっと身近にあるものでも心ぞうの音が聞けます。それは巻紙の芯です。どのお家にもあると思うので、ぜひ試してもらいたいです。ぼくの家には、ちようどちようしん器があったので、心ぞうの音を聞いてみました。「ドク、ドク…」と聞こえてきました。お母さんの心ぞうの音とくらべてみるとぼくよりゆっくりでした。大人と子どもではちがいがあるのかなと気になりました。血の成分についても知ることができました。血の中には、赤血球と白血球、そして血小板が数百万個います。ぼくたちの血が赤いのは赤血球が赤い色をしているからだそうです。ぼくが不思議に思っていた、血が止まる仕組みについてここで解決しました。それは、血小板の働きです。血小板は、血を固まらせる働きがあります。もし、血小板がなかったら、血はきず口から流れ続けます。あるときぼくの血を止めてくれたのは血小板でした。それから、白血球や赤血球がきず口を治していることが分かりました。

血について、ぼくが知っていることがあるのでしょうかいします。血を良い状態にしてくれる野菜です。それは、玉ねぎです。玉ねぎの中にふくまれ

ている成分は、血をサラサラにしてくれるそうです。ぼくは野菜が苦手なのですが、血のことを学んだら、ちょっとだけ勇気を出して食べてみようかなという気持ちになりました。

血は、人間や動物にとって、心ぞうと同じくらい大切なものだと分かりました。おかしや栄養のないものばかり食べていると、良い血が作られません。すると、体が元気でいられなくなってしまうと思います。だから、ぼくはこれからこんな生活をしようと思います。玉ねぎなどの苦手な野菜もちゃんと食べて、血をサラサラにします。大好きなゲームはほどほどにして、運動をたくさんします。血や体の仕組みについてもっと学んで、自分や家族の体の健康について考えます。

図書名 ちのはなし
著者名 堀内 誠一

入 選

釜石の奇跡

古館小学校 4年 石橋 央翔

釜石の奇跡とは一体何か。命を守る授業とはどのようなことなのか。題名を見てどういふ本なのか気になり、この本を選びました。

二〇一一年三月十一日。巨大つなみにおそわれた岩手県釜石市。一〇〇〇人を超える人たちが命を落としたり、行方がわからなくなったりしました。その中で、「釜石の奇跡」とよばれる出来事がありました。

しんさい当時、一八四人の児童がいた釜石小学校。あの日、子どもたちは、いつも通り早く下校しました。子どもたちのいた場所のほとんどが、地しんから三十五分後、大つなみによって飲みこまれてしまいます。「子供たちは助からないかもしれない」先生たちはかくごしたといえます。でも子どもたちは、自らの力で生きのびていました。

子どもたち全員が生きのびたことにほっとしたとともに、自分の命を守るため、一人ひとりが行動に移せたことに正直おどろきました。もし、自分がこの場にいたら、どうしたらいいかわからなくなってしまいそうだなと思いました。

弟を泣かせては、しょっちゅう家族にしかられていた四年生の拓馬くん。午後二時四十六分、ガタガタと家がゆれ始めました。ゆれがおさまった後、「おばあ、そうたいくよ。高台だよ、あんなでっかい地しんの後はつなみがくるんだろう。」その後、大きなつなみがおしよせました。目の前で家が流されていきました。なにもかも流されてしまった拓馬くん。それでも、大事な家族の命を守ることができました。

拓馬くんがす早く行動できたのは、学校で何度もひなん訓練をしていたからです。ぼくはこの拓馬くんの話をよんで、いつもやっているひなん訓練の大切さがわかりました。本を読む前は、なんでひなん訓練をするのだろうと不思議に思っていました。避難訓練でやってきたことを生かせるかと聞かれると、むねをはって「できる」とは言えないかもしれません。拓馬くんを見習っていざという時には家族を守れるようになりたいと思いました。

東日本大しんさいの時、ぼくはまだ生まれていません。家族に東日本大しんさいの様子を聞いてみると、釜石のほうのひがいはちがいました。ぼくたちの家族が住んでいた矢巾町では、つなみはなかったが、電気が使えなくなり、夜はろうそくや懐中電灯で過ごしていたり、食べ物を買うためお店には行列ができていたりしたそうです。余しんが続くなか、情報もラジオなどからしか得られず、こわかったと話してました。つなみが来なくても、大変な思いをして生活していたことをあらためて知りました。いつ起きるかわからない地しんに備えておくことの大切さを感じるとともに、いざという時には、ぼくが家族を助けられるように強くなろうと思いました。

図書名	アニメ版 釜石の“奇跡”	いのちを守る授業
著者名	NHKスペシャル取材班	

入 選

まほうのじどうはんばいき

赤石小学校 3年 中山 陽翔

まほうのじどうはんばいきって何だろう。この正体を知りたくて、ぼくは、この本を読みました。

主人公のこうへいは、学校の帰り道に、にじ色のじどうはんばいきを見つけてました。そのはんばいきには、ボタン一つと大きなうけとり口が一つあって、上には、「あなたのみかた」と書いてありました。こうへいは、お母さんにじどうはんばいきのことを話しました。お母さんは、

「おしてみたら。」

と言いました。次の日、こうへいは、しんきゆうをしてからボタンをおしました。うけとり口には、カブトムシがいました。こうへいは、虫のはんばいきと思いこんでいました。

次の日、こうへいは、学校がおわると、はんばいきへいそいで行きました。そして、またカブトムシが出てくるのかとボタンをおしました。ぼくは、何が出てくるのかドキドキしました。うけとり口には、算数のドリルがありました。どうしてドリルが出てくるのかふしぎでした。

それから、お母さんからかみなりをおとされると、ぞうきんとチョコレート。体育の日には、なわとび。公園の帰りに、

「暑いなあ。」

と思ったときには、ジュースが出てきました。

このじどうはんばいきは、今、自分がほしい物が出てくるはんばいきだったのです。ぼくだったら、おもしろい本が二さつと、むずかしいパズルと、あまいおかしがほしいです。ここまでは、

「ほんとうにまほうのじどうはんばいきだな。ぼくの家の近くにもあるといいのに。」

と、こうへいがうらやましく思いました。

しかし、次の日、このじどうはんばいきは、なくなっていました。こうへいは、かなしいようなくやしいような気持ちになりました。すると、お母さ

んが、ボタンをおしたらきえてしまったと、教えてくれました。お母さんはこうへいに、じどうはんばいきからそつぎょうしてほしかったのです。あのままはんばいきがあったら、こうへいは、だめな大人になっていたと思います。はんばいきに「あなたのみかた」と書いていましたが、ほんとうのみかたは、じどうはんばいきではなく、お母さんでした。お母さんが、最後までこうへいのみかたでいてくれて、良かったと思いました。

何でも自分の思ったとおりになることは、良いことではありません。こまっていたり、ほしい物があつたりしたときに、ボタンをおただけでかいけつしたら、一人では何もできない人になってしまいます。これは、とてもこわいことです。「まほうのじどうはんばいき」は、こまったことがあったとき、自分の力でかいけつしていく大切さを教えてくれる、とてもおもしろくて楽しい本でした。

図書名 まほうのじどうはんばいき
著者名 作…やまだともこ
絵…いとうみき